

資源についての断章

大塚和夫

東京都立大学

(A02 知識資源班)

キーワード：記憶と記録、文字、イスラーム、読み書き能力、知識人

0. はじめに

「資源」について小論文を書くという課題であるが、本プロジェクトに参加して初めて「資源」という言葉を真剣に考えた者——私だけではないと思うが——としては、まとまった「論文」を書くことは難しい。そこで、自分の属する班の研究テーマにある程度即して、いくつかの断片的な文章を綴ることでさしあたり課題に答えたい。本プロジェクトの終了時までには、もう少しまとまった議論を記せるようになりたいと思っている。

1. 資源について

ご多分に洩れず、私も手元にある『広辞苑』（第4版）を引くことから始めた。そこには、「生産活動のもとになる物質、水力、労働力などの総体」と記されていた。ついでに、やはり手元にある The Concise Oxford Dictionary (7th edition) の resource の項目も引いてみた。そこにはまず、means of supplying what is needed, stock that can be draw on, available asset とあり、これが日本語の資源にほぼ匹敵するものと思われた。

この2つの辞典を眺め、まず気づいた点は、資源とは、なんらかの目的のために活用されるものであるということである。その目的について、広辞苑は「生産活動」と明記しているが、オックスフォードではさしあたり「必要なもの」と漠然と書かれている。いずれにせよ、ある目的を実現するために「必要なもの」であり、その意味では「有用」と価値判断されるものが資源であると、ここでは考えておこう。

では、資源を必要とする、有用と判断する主体は何か。動物なども生存のために必要な生産をし、その際に何らかの資源を活用するであろうが、さしあたりここでは「人間」と考えておきたい。それというのも、私の所属する班の研究テーマは「知的資源」であり、「人間の知的活動」に主要な関心を向けていると思われるからである。動物などの「知的資源」を考える場合には、この断章とは異なる「知識」の定義や議論の枠組が必要になってくるであろう。

2. 知的資源について

知識が人間の活動にとって「必要」かつ「有用」なもの、つまり資源であるかどうかを検討する場

合、おそらくいくつかのレベルに分けて議論をしなければならないだろう。

a) 人間が生存するという目的のために、知識は必要で有用ものと考えられよう（時には、生存を止める、つまり死ぬためにも）。それというのも、人間は生きていく過程で、自己ならびに周辺環境を意味づけ、独自の「意味世界」を形成していくと想定しうるからである。人類学の言葉を使えば、人間は「文化」を持つ動物といえよう。そのような意味世界や文化において、「知識」は一定の重要な役割を果たしているとみなすことができる。

b) 意味世界や文化の形成、さらにそれらの維持、変容の過程において、言語が果たす役割には重要なものがある。実際、一般に知識といったなら、言語化されているものと考えられがちである。しかし、言語化されていない、またはされがたい知識というものも認められる。「身体化された知識」や「暗黙知」などと呼ばれているものである。だが、私の課題にとって重要なのは、さしあたり「言語化される知識」である。

c) 言語を用いた表現、さらに他者とのコミュニケーションには、さしあたり話し言葉によるものと書き言葉によるものと区別することができる。

d) だが、知識というものを、何らかの「実体性」——問題含みの用語だが——を持つものと考えたと、そこでは単なる一時的な表現やコミュニケーションとは区別された「持続性」という特性を考えなければならない。つまり、ある時点でなされた表現やコミュニケーションが、別な場・時において「引用」され、一定の人々に共有されるということである。それらは引用される価値があるということで「有用性」を持ち、資源、少なくとも資源となりうる可能性を持つということができよう。

e) 持続性という特性を考慮したなら、知識の「保存」を考えなければならない。ここでは「記憶」や「記録」といった保存手段が重要なものとなってくる。記録は有文字社会でのみ可能である。一方、記憶は有文字社会でも活用される——ただし、記録されるまでの過渡期的なものとする——が、無文字社会では知識形成に決定的な役割を果たす。

f) 上にあげた記録と文字との重なりについては、いくつかの留保が必要である。たとえば、特定の過去の出来事は、楽音、画像、味覚、遺跡、記念碑などによっても想起可能である。だが、それらは記録というよりも、記憶を想起させる契機（装置）と見た方がよいのではないだろうか。また、最近の科学技術によって、文字以外の記録というジャンル（テープレコーダー、ビデオ、CDなど）も成立している。記録は容易に実体化され、アーカイブズに保存されるものと考えてよいのだろうか。

g) 記憶または記録された知識は、機会あるごとに想起され、「引用」されたりする。その際に、「引用頻度」の高いものと低いものがあり、後者は次第に引用されなくなり、最終的には忘れ去られてしまう。資源としての価値が落ちるのである。一方、頻繁に引用されるものは、有用性が高いものと考えられ、その分「権威」を持つ可能性がある（もちろん、知識の存在は知られても、その内容が少数の者に独占され、他の多くの人々に隠匿されるがゆえに「権威」ある知識とみなされる例もあるだろう）。

h) このような権威ある知識は、特定の集団の人々によって伝承され、維持されることがある。そのような集団のひとつとして専門的「知識人」集団がある。このような知識人は、近代以前には「宗教

的」色彩をもつ場合が多かったが、近代以降はかなり「世俗的」存在となった。

i) したがって、この種の「権威ある知識」を消去しようとするならば、まさに「焚書坑儒」、すなわち知識の記録を消滅させ、記憶と記録によってそれを担ってきた集団の人々＝知識人を抹殺すればよいことになる。

3. 資源としてのイスラーム的知識

a) イスラーム世界には、アラビア語のジャーヒルとアーリムという用語で表現される対比が見られる。前者は無知・蒙昧な人物、後者は知識（イルム）を持った者という意味である。これはイスラームの信仰や歴史と重ねられる。アーリムの修得するイルムは前近代においてはクルアーン、ハディースに代表されるイスラーム的な聖なるテキストから派生してくるもの——近代以降、イルムは「科学」も指す言葉となったが——であるのに対し、ジャーヒルと同語根の言葉、ジャーヒリーヤはイスラーム成立以前のアラビア半島など、「真の信仰」に無知の時代・社会を指している。

b) アーリムの複数形がウラマーであり、これが伝統的イスラームの知識を修めた「知識人」「学者」を指す一般的用語である。彼らは、基本的に言語（アラビア語）によって記録された「書物」の学習を通して知識を得る。だが、クルアーンは元来朗々と「読誦」されるべきものであり、ウラマーには高度の「記憶力」が要求され、さらに「盲目」のウラマーも数多くいたことなどから、イスラーム的知識の獲得と伝達においては「書承性」のみならず、「口承性」も重視されていたことが分かる。

c) イスラーム史においてウラマーと対比的に語られるのが、スーフイー（イスラーム神秘主義者）である。スーフイーが得ようとする神秘的知は、一般に、イルムではなくマアリファと呼ばれる。さらに、彼らはズィクルなどと呼ばれる修行を実践するので、「身体化された知」に対しても関心が強いと思われる。

d) ただし、歴史的にも現代的にも、ウラマーでありスーフイーでもあった人物は多数いる。したがって、一部の社会学者や人類学者のように、両者の二分法を厳格なものとする立場には、問題がある。むしろ、知的エリート（ウラマー、さらには指導的スーフイーなど）とイルムに乏しい、無学な（ジャーヒル）民衆といった対比の方が、社会的には重要であると考えられる。

e) ところでイスラーム世界では植民地時代から独立期を経て、近代西洋的公教育さらに高等教育が浸透するようになった。その結果、ウラマーとは異質のムスリム知識人（大学教育出身者など）が生まれるようになった。興味深いことに、いわゆるイスラーム主義者の多くは、このような近代的高等教育を学んだ者であり、ウラマーではない。イスラーム的知識という資源は、現代ではウラマーの独占物ではなく、近代的教育施設によって高度の「読み書き能力」を身につけた者によっても活用できるものとなったのである。ただし、これらの人々の間に、もっとも権威ある知識、聖なるテキストの正しい解釈をめぐる対立や争いが生じていることも忘れてはならない。

4. 資源としての人類学的知識

さらに、「知的資源」班としては、「資源としての人類学的知識」にも当然ふれなければならぬ。

ここで述べてきた意味において、人類学は「知識の体系」であり、人類学者は「知識人」である。では「人類学的知識」は「資源」であるのか。もし、資源であるとしたならば、誰にとってのものか、そしていかに「必要」とされ、どの点で「有用」であり、実際どのように活用されているのか。「知的資源」の研究は、人類学者に自己反省的な視点も要求する。